

その「具体的」とは、いったい何を指しているのか。その為のエネルギーの中心、センドウ者、ひとり、あるいはふたり、そのとりまきとして5、6人の集団のカモシ出す臭い、高尚に言えば哲学、或いは関西風思考方法は、いったいなにであったのか。いまになって問う方法もない。また私は遠いところから見ていたに過ぎない。にもかかわらずその中心は確かにあったのだ。批評家は、それを作品に見ようとするだろう。具体、ゼン盛期のとき、相互のエネルギーはぶつかりあい、各々の個性は昇華され、見分けはキカないほどの巨大なエネルギーと化していた。そこに作家別を見るのは大変であり、また無意味に思える。

例えばピカソとブラックが立体派時期、見分けのつかない作品を作っている。それはそのウズマキを示すエネルギーの表示であってピカソらしく、ブラックらしくという個性を分けて見たことで意味はなく、その二つが一つにからまった。そしてまた別々に流れ出した時、自ずと個性は出てきて二人の異りをシュン別するわけだろう。だから、その似ている作品は駄目かということには決してならない。それは2人の時代を象徴するエネルギーの印である。そのことはグループ、またはエコールとして見分けのつかないほどの作品が、作家が、その場から出発するとき、当然、その作家は、源のエネルギーの中から自分自身に向けたものを摂取して、いわゆる自分の城、即ち作品を構築してゆくのであるから、以後、作家の思想の成長と作品の個性化によって、その作家は明確になってゆかざるを得ないのである。

具体のことは知らないが最初は中心的人物が作品、扇動とすべてひっぱっていくがこれがイキオイを持ってくると賛同者、低次元的に言えば物真似する人、新しい間違の方が目立ってくる。それは流行を作るより真似する方が簡単であり、単純の方がまた目立つし、より効果的なのである。とくに日本の国民性においては創始者がより賛同者または後続者の方が主役になっている。これは、何も悪いことではない。そうなりがちだと、いままでの経過を述べしているにすぎないのである。しかし、現在の、欧米経済を追い越した現在、あの強力な東芝すら社長が退陣してしまっていて、どうしていいのか判らぬと連日、新聞は報じている。いまこそ、東芝的解決策が切に求めとれているのである。何回も書くが、労働組合が真に経済的要求をするものだとすれば、結果として、週休2日、年休2週間以上と、労働組合が労働者のために要求すべきことだが、現在は全くそれが逆で欧米の経済摩擦の手段として、それをアメリカ議会、欧米の労働組合、それに勿論、会社のトップまですべてが一緒になって日本の内需拡大、即ち、日本の労働者の週2回休暇、年休2週間以上を強制している。勿論、日本の労働者にとって有利なことであるから労働組合はキットよろこんでいることであろう。しかし、それが労働組合の団結、運動を通じていないところは、敗戦の時の農地解放、6、3、4教育制に似て、私は、いまだにそれが一番いいことだと思っている。今回もそうで貿易摩擦がなかったら決して週2回休日は実現しなかったのではないかと思う。もし、日本の労働組合が実力で獲得したものであれば、自民党の一人独裁が、こうも長くつづくことは決してなかったであろうことだけは明言できるのではないかと思う。